

求められる「福祉」教育と人材育成に関して、福祉士養成課程におけるカリキュラム変更に期待すること

—現代社会とマイノリティ（吃音のある人）の声を掘り起こすことからみえてくるもの—

azbil(株)山武・特定非営利活動法人市民サポートなかま
専門職 2005 年卒 須田 研一

1. 問題意識と目的

現代はどんな社会だと言えるのだろうか。

自殺者は、11年連続で3万人を超えた。15歳未満の子供の数は1,714万人で28年連続の減少だ。少子高齢化にともなう年金・医療問題は深刻化している。特に、年金の問題は世代間の助け合いで成り立っているが、破綻しつつある。劣悪な待遇が問題視された介護者などの人材不足も深刻だ。老老介護・介護難民など、さらなる介護環境の悪化が予想されている。介護の問題が背景にあったとされるタレントの清水由貴子さんの自殺（2009年4月）は、まだ記憶に新しいところだろう。

さらに、「100年に一度」といわれる金融危機と世界的な不況のあおりから、雇用情勢も悪化の一途をたどった。さかのぼれば度重なる労働法制の規制緩和によって、非正規雇用が拡大し、今では3人に1人が非正規雇用者となっている。ワーキングプアやネットカフェ難民、生活保護受給者やホームレスの増加など、「貧困」問題が顕在化してきた。

このほかにも、凶悪犯罪、非行・いじめの問題、子どもや高齢者、障害者に対する虐待、差別など、現代社会が抱える問題は実に多くある。このように社会をみると、人の命や人権は軽視され、人と人との助け合い（相互扶助の精神）やつながりといった連帯感も薄れつつあるようだ。

そんな状況の中であって、福祉士養成課程における大幅なカリキュラム変更がおこなわれた。これは、「認知症の者や医療ニーズの高い重度の者が増加するとともに、成年後見や障害者の就労支援など、国民の福祉・介護ニーズはより多様化・

高度化してきている状況」にあることや、平成19年11月の「社会福祉士及び介護福祉士法」改正と併せて、「より一層質の高い社会福祉士及び介護福祉士を養成していく」¹ことが求められてきたことからきている。

社会福祉士養成課程でのカリキュラムについて、日本社会事業大学の大橋謙策は「従来のような老人福祉論や児童福祉論という分野ではなくて、ソーシャルワーク」や「地域福祉を基本に教え」ていくと述べている²。

同様に介護福祉士養成課程も、『介護技術』『医学一般』『老人福祉論』といったように科目単位から『介護』『心と身体』『人間と社会』の三つの領域に再編され³、たとえば、「再編されたカリキュラムでは『食事』『排泄』に必要な『心と身体』の仕組み』といったように『生活支援技術』の学習内容と関連づけながら、『介護』に必要な医学的知識として学ぶようになった」。つまり、共に、より「実践力」が重視された内容へと改められたのである。

しかし、社会をみると、「実践力」を養う以前の大きな問題—命や人間の尊厳といった見過ごすことのできない問題—が見え隠れしているように思えるのである。

そこで本稿では、現在の社会を見据えながら、マイノリティ（ここでは「吃音者」）の置かれた現況を通して、福祉士に求められる教育と人材育成について、福祉士養成校に期待することを述べてみたいと思う。

2. 研究の視点

吃音（児・者）について、福祉士養成校で学ぶことはないであろうし、福祉の問題としてとりあげられることもまずないだろう。筆者がここで「吃

1 厚生労働省『社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて』平成20年4月

2 『原宿会』日本社会事業大学同窓会会報、第63号。インターネット上に公開された他大学のカリキュラムでも、「ソーシャルワーク重視」や現場での「実践力」と言った言葉が多くみられた。

3 介護福祉士養成講座編集委員会、『介護の基本Ⅱ』、2009、中央法規、p13-15

音者」を取り上げたのは、筆者自身がこの問題について、特に、少年期に深く悩んだ経験をもつことと、こうした個別の人々の置かれている状況や課題を軽視すべきではないと考えているからである。したがって、研究の視点は、当事者に立脚しての考察である。

3. 吃音（どもり）とは

(1) 吃音の定義

百科事典によれば、「〈どもり〉という現象は、話しことばの流れのうえにみられる異常な乱れであり、話そうとするときに音やことばを繰り返す（連発）、音を引き伸ばす（引き伸ばし）、ことばがつかまって出てこない（難発）という状態⁴とある。また、WHO（世界保健機関）の定義では、「話者は、自分が何を言いたいかわっているが、不随意的に生じる繰り返し、引き伸ばし、発生の停止のために言うことができないようなスピーチのリズムの障害を吃音⁵と言っている。一言に吃音といっても、そこには「繰り返す（し）」「引き伸ばす（し）」「ことばがつかまって出てこない」（WHOの定義では「発生の停止」といった三つの意味があることがわかる。

これらを会話調にすると、一つ目の「繰り返す（し）」は、「わわわわたしは、」といった音、音節が重なる言い方であり、二つ目の「引き伸ばす（し）」は、「わあ——わたしは、」といった音を引き伸ばす言い方である。そして、三つ目の「ことばがつかまって出てこない」や「発生の停止」は、「——わたしは、」となって、「——」の部分は声を出そうにも出てこない沈黙した状態を、それぞれ吃音と言っている。

(2) 吃音者の声

吃音者の中には、吃音にとらわれずに人生を謳歌している者も多くいる。しかし、吃音によって、「生きづらさ」を抱えた吃音者も少なくないの

ある。ほんの一部であるが、そんな吃音者の声を集めてみた。

「吃りながら全館放送すると、上司から『あなたが放送すると、マイクを通して変な息や音が入るから、マイクから遠ざかって喋って』と言われてたり、申し送りで吃ると、前で聞いている職員に吹き出して笑われたり、内線電話に出た際、自分の名前を名乗れないでいると、『いくらお前でも名前ぐらい名乗れ』と先輩に怒鳴られたり、毎日が吃音との戦いでした⁶。福祉専門学校を卒業し、現在、介護の仕事をしている女性吃音者の声だ。

大学院を卒業した男性吃音者は、吃音が原因で、ホワイトカラーからブルーカラーへと配置転換を余儀なくさせられた。落語家の（三代目）三遊亭圓歌も国鉄マン時代（現「JR」）における異動にまつわるエピソードをこう語っている。

「当時は、今みたいに拡声器なんかなかったの、駅員がホームにたつて、電車が来ると、メガホンで、『新大久保！』って大きな声で言うんです。「私は言えないんです。どうしても、どもっちゃうもんですから……。『し、し、し、し、新大久保』って言って目をあけると、電車ははるか彼方に行っちゃまって……。こりゃあ、人がいるところじゃだめだってんで、今度は小荷物の係⁷。

電話が苦手な吃音のあるサラリーマンは、「上司から『電話がこんなじゃ仕事にならない。他の仕事を探せ』と言われた。電話が上手にできなくても他の部分で十分にカバーしていると考えていただけに、ショックでした⁸と語った。派遣先の上司から「吃音では、どこへ行っても正社員として働くには厳しいだろう」と言われたなど、周囲の無理解さからくる言動に深く傷つき、悩んだ経験を語る吃音者の声は実に多くあるのだ。そうして人と話すことを避けるようになる吃音者もいるのである。

4 『世界大百科事典』、1998、平凡社、p433

5 日本聴能言語士協会講習会実行委員会編集、アドバンスシリーズ『コミュニケーション障害の臨床2 吃音』、2001、協同医書出版社、p20

6 吃音のある人のセルフヘルプ・グループ言友会会報 No82,2008,1,2月号

7 三代目・三遊亭圓歌、『これが圓歌の道標』、1998、東京新聞出版局、p48

8 水町俊郎、伊藤伸二編、『治すことにこだわらない、吃音とのつき合い方』、2005、ナカニシヤ出版、p30

4. まとめ

吃音者の声を通してわかることは、ノーマライゼーションやインクルージョンを率先して実践していかなければならない福祉施設で働く職員でさえも、人権感覚の麻痺に陥る可能性があるということである。また、吃音者を取り巻く環境は、誤解や偏見、差別的言動といったことに満ちあふれている。さらに、吃音者の中には、吃音が原因で配置転換など不利益な扱いを受けた人もいる。人並みにできないということは、この社会では否定的にみなされる。このように、一般的にマイノリティは、(吃音者に関わらず)差別や偏見、ステイグマにさらされ、社会の周縁に追いやりられたり、排除される危険性が色濃くあるといえる。そして、そういった「生きづらさ」を抱えている人々の視点に立ったときに、求められる「福祉」教育や人材育成に欠かすことの出来ない概念が見えてくるのではないだろうか。

つまり、現在の社会やマイノリティが置かれている現状からわかることは、福祉の根幹といえる「人権の尊重(尊厳)」とは、余りにもかけ離れた現実にあるということだ。

では、どのような「福祉」教育が求められるのであろうか。

私が思う「福祉」教育(思想)とは、たとえるならば、「枯れ木に水を与える」価値観である。なぜ、枯れ木に水を与えるのか。「枯れ木」を高齢者に置き換えてみると、なぜ、我々現役世代が高齢者を支えなければならないのか。よく言われるように、いずれは自分自身も高齢者になり、あるいは何らかの障害をもつ可能性だってある。すなわち、そういったことを自分自身の間

題として受けとめ、考えることだと思うのだ。

そして、もう一つは、「多様な生き方を尊重」、「多様性を受け入れる社会」、「多様な人々が共存、共生できる社会」とはいいながら、一方で、自分とは異なる人、ふつうでない人たち(少数派)を排除、差別している現状を直視することである。

したがって、今問われるべきは、現場での「実践力」のほかに、多様な人たち⁹の人権にふれあいつながら「福祉」について考える授業(教育)が同時に求められていると思うのである。

なお学内発表では、自己エスノグラフィー¹⁰という手法を用いて、自分自身の体験も語りながら発表を行った。

9 たとえば、同性愛者・性同一性障害・ホームレス・ハンセン病患者・ユニークフェイス等。また、1999年「人権教育のための国連10年」では、女性・子ども・高齢者・障害者・同和問題・アイヌの人々・外国人・HIV感染者・刑を終えて出所した人などの人々の人権が取り上げられた。

10 エリス・ボクナーによれば「自己エスノグラフィーとは、ジャンルの的には自叙伝的な記述とそれをとおした研究に属し、個人と文化を結びつける重層的な意識のあり様を開示するものである。自己エスノグラフィーの実践者は、エスノグラフィックな広角レンズをとおして、過去と未来を見据えながら、まずは、自らの個人的経験の社会的・文化的諸側面へと外から迫っていく。そののち、そうした経験の内面へと迫り、文化が提供する習慣的な解釈のあり様によって動かされたり、またそうした解釈を促進したり変形したり差し止めする、バルネラルな自己というものを開示することになる」と定義している(鈴木隆雄『神経難病患者として出会った医療の世界』千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告集 第190集)。
神経難病患者でもある鈴木隆雄は、「当事者の自己エスノグラフィーは、社会からは、<隠されてきた/語られなかった>世界を他者・社会に向けて表現していくことになるので、その当事者の文化などに『直接』援助はしなくても、メッセージを伝えることになる」と述べている。つまり、鈴木は自己エスノグラフィーを、その文化や社会、当事者への「間接」援助ととらえている。